信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	**マレーシア、サラワク州での農山村調査法実践演習プログラム**		
学部・研究科名	全学教育機構		
実施期間	2016年3月1日～3月10日		
研修先(国・都市・施設名)	マレーシア、サラワク州、バラム河上流農山村		
参加学生数　：　8名		知の森基金からの支援者　：　7名	
プログラム概要	本プログラムは、平成27年度後期の共通教育の教養ゼミ、「環境マインドを現場で体験するゼミ(熱帯雨林)」において実施した。前期の講義科目、「熱帯雨林と社会」のアドバンスト・プログラムとして企画した。海外活動先はマレーシア、サラワク州である。サラワクは、熱帯雨林の生物・文化の多様性の宝庫といわれ、かつ森林産物や一次産品を通じて日本と深いかかわりをもつ。今回の訪問先は、サラワクにおいて唯一自然保護区以外でまとまった原生林が残っている地域である。現地では、国際協力の分野で活用されている参加型農山村調査法(Participatory Rural Appraisal; PRA)を演習した。PRAとは、外部者と地域住民が一緒になって、住民の生活や生計についての情報を集め、分析することによって、彼らのニーズや課題を探っていくアプローチ、手法のことである。演習を行ったのは、先住民族が暮らすロング・ララン村とロング・クパン村である。前者は水田及び焼畑農耕、後者は狩猟採集を主な生業としている。		

実施状況・成果

1. 農耕民を中心とするロング・ララン村を訪問し、PRAを実施、グループ演習(聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーション)を行った。村人が小規模で始めたコーヒー農園も視察した。

2. 狩猟採集民を中心とするロング・クパン村に滞在し、PRAを実施、グループ演習(聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーション)を行った。村周辺の原生林地帯を歩き、そこでの資源利用について聞きとりを行った。

3. ロング・ララン村に設置されている小学校を訪問し、校長先生ほか諸先生方に対して、農山村地域の教育の現況や課題について聞きとりを行った。

4. 移動には小型プロペラ飛行機やボートを利用したが、道中アブラヤシ・プランテーション開発の様子を観察し、貿易を通じた自分たちの暮らしとのかかわりや課題について議論した。

5. 事前教育として平成27年度後期の土曜日を中心に計6回集まって、PRAの訓練のほか、現地事情の学習などを行った。うち1回は京都大学総合博物館の小泉都先生(民族植物学)から特別レクチャーをいただいた。

6. 参加学生は現地でまとめたプレゼンテーション資料に加え、帰国後に演習レポートを作成した。引率教員のコメントなども収めた報告集(冊子)として発行する。

ロング・ララン村及びロング・クパン村で3つのグループに分かれて PRAの聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーションを遂行した。学生たちは、当初は試行錯誤しつつも、次第に自分たちのもつ語学力で的確な質問をし、数値や図表を利活用し、丁寧に議論する方法を学んでいた。学生たちは全員、村長、村人などと積極的にコミュニケーションをはかっていた。異文化コミュニケーション、社会人基礎力、環境マインドの醸成といった教育的な効果は顕著であると感じた。なお、成果の検証には、4月中に発行する演習レポート(報告集)も参考にする。また、平成28年度前期の教養科目「熱帯雨林と社会」において、主に本学1年生向けに報告会を予定している。

本プログラムに参加した学生は8名にすぎないが、学生も教員も大きな達成感と手応えを感じた。昨年度の当プログラムに参加した学生のうち1名は今回知の森基金による支援なしでも参加を熱望し、今回のゼミのリーダーとして活躍してくれた。また、別の学生は昨年度訪問した現地NGOにその後インターンとして数ヶ月間活動に従事し、さまざまな社会体験を重ねている。彼は、本プログラムにおいて一部の日程に合流し、後輩たちにインターン経験に基づく貴重な助言をしてくれた。このように、本プログラム参加により、グローバルな諸課題への関心が高まり、その解決に積極果敢に立ち向かう力が養成される。本プログラム参加学生には今後も自ら積極的に海外で出て行動してほしい。同時に、今後も本プログラムを継続して実施してまいりたい。

学生の声①－農学部　学生

今回このゼミに参加できただけで、もうすでに信大に来た意味があると私は思った。それほどまでに、このゼミに参加するということは私にとって、思い切った決断であった。自分の目で見ること、耳で聞くこと、肌で感じること、現場で考えることは大切であり、経験として得られることは大きい。参加したことで、前期の講義内容をより深く理解することができた。この目にオイルプランテーションと原生林の姿は焼き付いているし、現地の方々の優しさと手の温もりは、今思い出しても胸が熱くなる。

学生の声②－理学部　学生

ロング・クパンを訪れたその日に、念願の原生林へ行くことができた。原生林の中にいるときに、私は今まで歩いてきた森とは何かが違うと感じた。具体的に何が違うかを説明することはできない。だが、原生林の中は普通の森とは違う空気が流れているような、何か密度が高いような、不明確な言葉だが大自然が圧縮されているような気がしたのだ。ここは神聖な場所だと感じた。虫や鳥の鳴き声が多くきこえる中で、今まで感じたことのない、貴重で不思議な時間を過ごすことができた。

参加型農山村調査法の実習

熱帯原生林を歩く